

ウプサラ大学のチャペル

スウェーデンの 古都ウプサラ

河野 仁 昭

パリのドゴール空港を発った双発のジェット旅客機が、雨雲をついて降下をはじめて間もなく、機体の底部になにかがぶち当たったような強いショックがあった。そこがスウェーデンの国際空港アルランダであった。パリから約二時間三十分。時差はない。

空港から首都ストックホルムまでは四十キロ余。行けども行けども雑木林ばかりで、昨夜までパリのストリートを歩いていた者の眼には、地の果てのようにわびしい光景であった。雨と濃霧のために、ひとしおそうであった。

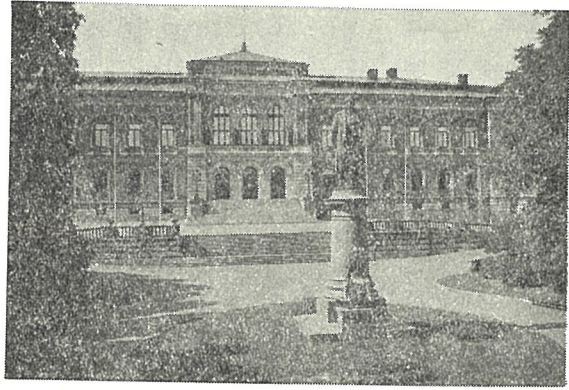
都市計画が早くから進められているストックホルムの市街は、あっけないほど清潔であった。市民の住宅は、日本のマンションのような集合住宅が普通で、それが広い街路に沿って整然と建ち並んでおり、いたるところに広大な緑地がある。雨の日曜日のせいでもあるが、歩道にもほとんど人影がない。日曜日は一般の商店だけでなくデパートも休業なのだ。

巨大なメラーレン湖がバルト海に接する入江に二十余の島がある。その島々に街がつくられたのは十三世紀であった。海上交通の要

衝の地だから貿易が盛んで、十六、七世紀に商業都市として最も栄えたというから、古い街並みはそのころのものである。それらの石造りの建築物はオランダの影響をうけているときいたが、オランダの建築物を知らないわたしには、果してそうか否かはわからない。ただ、パリのそのような繊細な装飾がなく、武骨なほど重厚であった。それでもなおかつ様式に通じるところがあるのは、各国の文化と混交してヨーロッパの文化は形成されていることの証であるにちがいない。

最も古い街並みは王宮のある島のそれで、^{グスタフ}古都と呼ばれている。島が沈みはしないかと人々が心配したという、それほど壮大な石造建築に覆われたこの小島には、中世の陰影がただよっている。表通りに面した建物の一階に、ブティックや喫茶店が開かれているのが、現代とのわずかな接点であるように思われた。

それにしても、この公園のような街で、活気にみちた産業や商業活動がなされているとしたら、むしろそのほうが不思議だ。市の人口は一三〇万、労働者の半数ちかくが公務員だという。民間企業も貿易も伸びず、政府は



ウプサラ大学本館

累積赤字に四苦八苦の状態にある。労働者の税負担も軽いものではないらしい。けれども社会福祉予算だけは削減しないのである。市民の選択であるかどうかは知らないが、貧しくても共に助けあって美しく住む、それがこの街のポリシーであるらしい。

わたしたち海外大学セミナー一行の目的地の一つであるウプサラは、ストックホルムか

らさらに北へ、バスではぼ一時間、小高い丘陵を背にした田園の中の小さい町であった。メラレン湖はここまで広がっているときいたが、途中のハイウエーからは、刈りとられたライ麦畑と雑木林しか見えなかった。

市内へ入ったバスの中で、わたしたちは顔を見合せた。メイン・ストリートはまるで官庁街のようで、商店らしい看板さえほとんど見当たらないのだ。禁酒禁煙を奨励している国だけに、首都のストックホルムではスナックのような店さえ見かけなかったが、ウプサラはもっと徹底しているのではないかと思われる。ストックホルムのベッド・タウンに過ぎないのかも知れない。

五階建のまだ新しい鉄筋コンクリートのサラ・ホテルは、メイン・ストリートの外れにあった。部屋ヘトランクを運び込んでおいて、一階のレストランで夕食のテーブルについていたら、赤いセーターを着た長身の女性が、事務員ふうの青年を伴って現われた。「よく来てくださいました。わたしはセミナーのお世話をさせていただくウォーレンsteinです」と、流暢な英語で自己紹介をした。学長第一秘書というのが彼女の職名であ

った。あいにく明日は学長と文部省へ行かねばならないので、セミナーの資料を届けに来た、「事前に読んでおいて下さい」という意味ではごさいませんが、読まないで下さいとは申しません」。この町へ着いてはじめて、わたしたちは声をあげて笑った。

ウプサラの水は、実にうまい。わたしは故郷の村の清冽な湧き水の味を、この北欧の田舎町のホテルで思い出したことを、幸運にもった。学長秘書の心くばりとその水が、わたしの心をウプサラにつないでくれるのを感じたからである。

日ごろとは逆に、旅に出てからわたしは早く眼が醒めた。九月十二日午前六時、窓ざわに取り付けられた温度計は十度五分を指している。霏が晴れるに従って、窓の外のかすんだ民家の家並みが浮かび上ってきた。どの家も分厚い壁をもっていて、冬に対する身構えを示している。

一四七七年に創立されたウプサラ大学は、ホテルから歩いて十五分ばかりの、小高くゆるやかな丘陵の斜面にあった。丘陵の裾に幅三、四メートルの流れがある、そこが町と大学の境界のように感じられるが、大学には門

も柵もない。流れのほとりの建物は、赤いレンガや石造りの古いものばかりで、大学のそれとあまり変りがない。おそらくこの一郭がウプサラの最も古い部分で、大学と歴史をもにできたのだらう。

ローマの神殿を連想させる大学の本館へ案内された。神学館として建てられたものだとわかれて、なるほどと思う。玄関を入ると、天井が吹き抜けになった広い廊下が左右に広がっていて、正面の壁にスウェーデン語で、

「自由に考えるのはよいことだ」

正しく考えるのは更によいことだ」

と刻んだタブレットが嵌め込まれていた。この建物が建つとき、ここに掲げることばを考えるために五人の委員が選ばれて、五年間討議をしたが、五つの提案をして解散した。一つに絞りえなかったわけで、しかも、タブレットに刻まれているのは、五つの提案の中にはなかったことばだという。まさか皮肉の語ではあるまいが、大学人にとっては、そのプロセスのほうがより大きな教訓かもしれない。

その建物の二階の会議室が、セミナーの会場に当てられていた。歴代の学長の肖像画が壁面を飾っており、壮大な赤レンガ建築の古

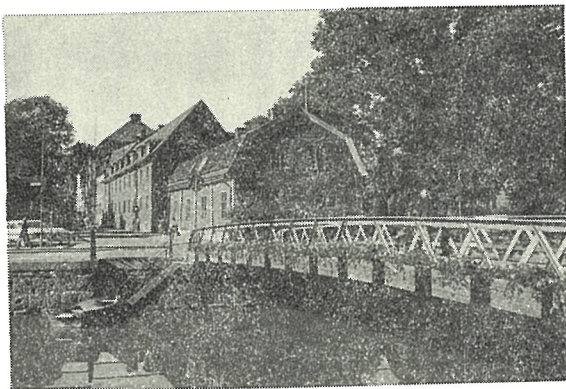
い教会が、窓から見えた。

これくらい古い大学になると、その大学の歴史はそのまゝ国の文化の歴史にほかならないというのが、初めて外国の名門大学を訪問したわたしの実感であった。ウプサラ大学を創始したのはカトリック教会で、聖職者の養成が目的であった。ところが宗教改革以降、この国でも新教が主流になり、大学もまたそうになった。ギュースタープ王はそれと不満として援助を打ち切ったので、大学は閉鎖のやむなきに至った。けれども結果的には王室は大学を見捨てはしなかった。一六二〇年に新教の大学として再建されたウプサラ大学に、ギュースタープ二世は遺産のすべてを寄付したのである。その寄付が十九世紀中ばまで、この大学の財政的基礎となった。大学図書館はそのモニュメントの一つである。

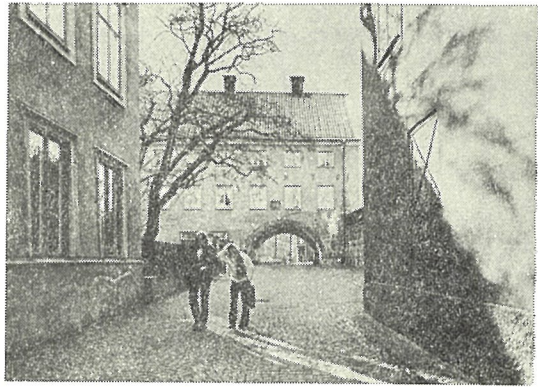
図書館前から十数分登った丘陵の頂に、赤レンガ造りの古城がある。十六世紀に建てられたギュースタープの王宮で、最近では、ウプサラ大学が誇る卒業生の一人である元国連事務総長ハマーショルドが起居し、執務したという。いまも住んでいる人がいるらしく、窓のいくつかには白いカーテンがかかってい

た。大学はこの王宮の庭先ともいふべき斜面にある。

十八世紀に入って、ウプサラ大学は古くからの神学、医学、法学、哲学の四学部だけでは時代に即応できなくなり、自然科学部門に力を注ぐことになった。リンパ腺の発見者、ルードベックがその時代の代表的な学者で、彼はウプサラをヨーロッパ文化の中心に位置



ウプサラの小川のほとり



大学へ通じる石畳の道

づける文化論を展開して、スウェーデン国民に自信と誇りを与えたのである。植物学のリンネや、摂氏温度計の発明者セルシウスなども、その時期にこの大学にいた。

だが、ウプサラの栄光はその時代までであった。ドイツ・ロマンティズムなどの影響があつて人文科学が重視されるに従い、中心はストックホルムへ移動した。政治・経済的

にもそうであつた。現在のウプサラは人口十万程度、大学の技術指導をうけたという製薬会社が最近操業を開始したようだが、伝統的なクリスタルガラスや金属加工など、手工業に毛の生えた程度の産業しかないらしい。完全にストックホルムのベッド・タウンの一つに組み込まれてしまつていて、かつてここが文化の中心であつたとは信じがたいほどさびれきつてゐる。

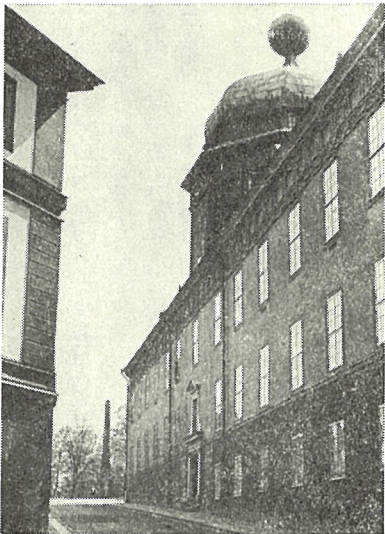
けれども、ウプサラ大学だけはいまも健在なのだ。二十世紀に入って間もなく、自然科学への関心がたかまり、この大学はふたたびスウェーデン国民の期待を担うこととなる。ノーベル賞の栄誉にかがやく科学者を多数輩出したし、世界の注目を集めている地震研究所が、その象徴的な存在の一つである。

ウプサラへ来て三日目の午前、ウォーレンステインさんがわたしたちを案内して下さつたのは、ウプサラ大学が誇る生化学研究所であつた。大学の建物の間を斜めに抜けて古城の前をとる道路をし

ばらく走ると、郊外の田園が広がつていて、田園の寄りつきに研究所はあつた。センター・ポールにはためく日本とスウェーデン両国の国旗と、副所長がわたしを待っていた。

「よい研究をなすには、フレキシブルな頭脳と施設が必要だ。施設は研究と教育の貴重な道具だ」と、驚のような眼をした白髪の副所長はいった。建物内の什器、水道、ガス、電気はもちろん壁までも、その部屋を使う研究者なりグループが、最も使いやすいようにルーム・デザインし、そのデザインに従つて配置を変えられるように造られている。決し

最も古い校舎の一つ（現在は博物館）



て豪華ではないが、すこぶる機能的で、学際研究をおし進める上でも有効なのだ。医学、薬学、獣医学、自然科学各分野の研究はすべてここに集中しており、一千名の研究者や助手と、一五〇〇名の大学院生が所属している。近くの農科大学もここで共同研究しているという。研究者は世界各国から集っているらしい。まさに研究のための工場だ。この工場がウプサラ大学の伝統をいつそう輝かしいものにするだろう。創造的な新しい力を加えつつけるのでなければ、伝統はたんなる伝承にとどまるほかない。

生化学研究所へ行くまえに、ウォーレンステインさんに案内されたのは学生寮であった。町はずれの丘の上に、四階建ての新しい寮棟が数棟並んでいた。ごくありふれたコンクリート建築であった。すべての部屋が個室になっていて、男子寮、女子寮の別はないという。

「スウェーデンではフリー・セックスが問題になっているそうですが」と、寮の廊下を歩きながら、わたしたちの一行のだけれが遠慮がちにいった。「そうかも知れませんか」と、ウォーレンステインさんは応じた、「それが

もし事実だとしても、それは学生個々人のプライベートな問題です。大学は研究をし教育をするところですから、そういうプライベートな問題にまで関与する必要があるとは考えておりません。すがすがしいほど明解なことであつたから、わたしたちは無言で納得の意を示したのであつた。

「わたくしの家も見て下さい」と、ウォーレンステインさんは彼女のアパートへも案内して下さった。大学を中に置いて、生化学研究所とは正反対側の郊外に、赤レンガの三階建てのアパートが並んでいて、その一棟の二階が彼女の住まいであつた。ご主人は『戦争はいかにして始まったか』という著書をもつウプサラ大学の政治学の教授で、お子さんは二人。家賃は月六万円ぐらい、4DKだろうか。「これがわたくしたちの国の、ごく一般的な住まいです」と、ベッド・ルームのドアまでも開いて、彼女ははにかんでいった。「見ていただくつもりはなかったのですが、散らかったままです。わたしは軽率な女ですから、母が知ったら、きつとまた叱るだろうと思います。でも、折角日本から来てくださった皆さまに、こんなことでしかお役にたてな

いのですから」

アパートの中庭にリンゴの木が枝をひろげていて、色づくにはまだ早い実が葉のあいだからのぞいていた。

その日の午後、任意にストックホルムへ観光に行く仲間と別れて、わたしは心ゆくまでウプサラの町を歩いた。町の人々には、東洋から来た男が珍しいようであつたが、ショッピング街でもバス・ターミナルでも街頭でも、拒絶のまなざしには出会わなかった。店番をしていた少女に泣きべそをかかれたほかは、だれもがみな英語で応答してくれた。

大学にほど近い小川のほとりの、古い小さい赤レンガのレストランで夕食をとった。辞書まで持ってきて、ボーイはメニューを英訳してくれた。この町へ来てから、人にも料理にも不満をおぼえたことはない。久しぶりにワインで酔った脳裡にすかすかに満ちてくるものは、どうやら旅情だけではないようであつた。

(本部社史資料室長)